

ダンス学習指導における導入方法について

谷 口 陽 子
指導 松 木 伸 子

はじめに

学校教育の中に創作ダンスがお目見えして45年程を経ようとしている。戦前の既成作品を教える指導から、自分で作り出す創作ダンスへの切りかえは、教師たちのとまどいと混乱を当然生じた。

むろん、人類は大昔から感情を表現するために踊ってきた。これらは決して、リズムやフォームだけを追ってきたのではなく心の動きが人々を動かし、歓び、悲哀、恐怖、希望などを表現してきたのである。したがって授業の流れにおいてもこれまでのように、題材の選択→デッサン→フレーズ→作品という技術の一連の流れがそのまま学習過程にスライドされるのではなく、楽しみ方のステップとして学習過程が押さえられなければならないようになった。

今、我々体育教師は、ダンス本来の「ダンスそのものを楽しむ学習法」を追求しているところである。それは、「ダンスを通しての教育」例えば、ダンスをすることによって協調性や創造性が高まったとか、創っていく苦しみを乗り越えた時の喜びの大きさを感じさせることができたというようなダンスに付随しているものを目あてにしていた時代は終わったのだ。

また、表現ダンスの学習は子どもたちの活動欲求を十分に満たしてないことが問題となり、身体活動を十分にするために指導の際の言葉がけが重視されている。このように表現ダンスは指導力がなくてはできないという観念が、教師（特に男性）の中に生じ、指導がまったくされないという状態を生む結果にもなっている。

これらをふまえ、表現ダンスの現場がかかえている問題を明らかにし、その解決の手がかりとなる方法（導入段階において）の提示を行ってみたい。

方 法

文献及び資料による検討及び、直接現場に赴いての実態調査により資料を得、行った。実態調査は、1988年、1989年、1990年、1991年、1992年、日本女子体育連盟主催、学校体育講座に参加した小学校、中学校、高等学校の現場体育教師に対して行った。

考 察

1. ダンス学習、現場のかかえる問題点

体育授業の中で表現ダンスが、どのように受け入れられているのだろうか。表現ダンスは運動量が少なく、男性教師からは十分に認められていない現状がある。最終的に『ダンス発表会』を行う為とその作品づくりを目的とした授業が行われている。また、運動会で行われるマ스ゲームの動きを写しかえるだけの表現ダンスの授業が存在している。これらは、『表現ダンスの授業は話してばかりで体育の授業とは言えない。』『運動会のマ스ゲームはダンスの要素を多く含んでいるのでその他に表現ダンスの時間をとる必要はない。』のような考えをもつ教師に表現ダンスの授業を理解してもらえない場合である。表現ダンスの授業が行われている学校でも、体育館の半分はバスケットの授業をしているなどと好条件の中で授業が行われているとは限らないのである。全てこれは、表現ダンスの学習が多く教師に充分理解されてないことから来る問題であろう。また、新学習指導要領に示された選択幅は図1である。

現在のところ、選択制の実施は東京都内の国公立の中学校高校の約半数において進め

図1. 新学習指導要領に示された選択幅

領 域	中 学			高 校		
	1年	2年	3年	1年	2年	3年
A体 操	○	○	○	○	○	○
B器機運動	○	} 選 択 ②	} 選 択 ①—②	選択③— ④ その 際、F又 はGのい ずれかを 含める。	1 年 に 同 じ	1 年 に 同 じ
C陸上運動	○					
D水 泳	○					
E球 技	○					
F武 道	} ①	} ②	} ②			
Gダンス						
H体育理論	○	○	—	○	○	○

(○印は必修、または丸付きの数字は領域の選択数を示す)

られているようである。選択制をとり入れることにより男女共習の機会が増えると思われるが、男女共習によるダンスを進める場合、表現ダンスが敬遠され、フォークダンスやジャズダンス、エアロビックダンス、などが手軽なものと考えられる傾向がある。また、エアロビックダンスはエアロビックエクササイズであり、エアロビクトレーニングであるので、目的から体操領域に位置づくものであろう。

次に現場の体育教師に直接、現在ぶつかっているダンスに関する問題点を聞いてみた。これは、1988年（参加者約130名）、1989年（約120名）、1990年（約130名）、1991年（約120名）、1992年（約110名）の日本女子体育連盟主催の学校体育講座を受講した小学校、中学校、高等学校の教師（中学校、高等学校については体育教師）と共に自由討議に参加し話を聞いたものである。体育学習に関する問題では、『表現運動の学習指導をあまりやっていない現状がある』『現場では敬遠されがちな領域であり、全てのクラスで実施するということが難しい場合がある』。つまり、授業担当のしかたで、ひとりの教師が、学級を担当し、年間のすべての内容を指導する場合に、表現ダンスをフォークダンスに置き換えてしまう場合がある。また、新指導書要領への移行、実施に関する事にも、『小学校においては、中学年、高学年の指導書の例でするとき、はげしさ、力強さとあるが、感じや特徴が似ているような気がしてうまく分類できない。』『中学校での男女選択性の実施で男子にもダンスの機会があるので小学校で子どもが表現ダンス未経験ではいけないのではないか。』のような問題点を挙げている。表現ダンス指導に関する事では、『低学年の時にいっさい表現ダンスをやったことがない高学年の表現へのとりかかりの難しさ。』『小学校で運動会のマ스ゲームしかやったことがない中学生への導入の仕方。』『はずかしさを取りのぞき、身体をいっばいに使わせたいが、なかなか難しい。』『表現ダンスはできる人にまかせて本人は動こうとしない。』と、導入段階での教師の悩みは多い。また、『動きが未熟でも好きになるということが表現ダンスでは難しい。』『子どもの動いてみたい、～になりたいという願いがなければ、学習は本来成りたないと思う。その為の題材の選び方、出会わせ方、課題のたせ方が難しい。』『子どもたちの創った作品に対するアドバイスの内容が思いつかない、どう指導していいかわからない教師も多い。』などの問題点や意見もあった。

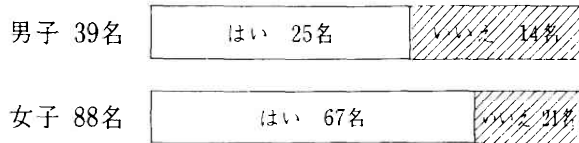
次に実際に小学校、中学校、高等学校と体育の授業をしてきた子供たちは表現ダンスに関してどれだけ接してきているのだろうか。宮本は中学生について1989年に図2のように報告している。また高野は高校生について1980年に図3のように報告している。また、古川らは大学生について1987年に図4のように報告している。

次に表現ダンスに関してどのように思っているのだろうか。中村は1980年に図5のように報告しており、酒井は1987年に図6のように報告している。また、T女子大学1年生に授業前に同じ質問をしてみると、酒井とほとんど同じような解答がかえってきた。

ダンス学習指導における導入方法について

図2. 表現・ダンスの経験と好き嫌い
宮本乙女（お茶の水女子大学附属中学校）

Q. 小学校で「表現・ダンス」をしましたか。



Q. 「はいの人」 その時の印象は

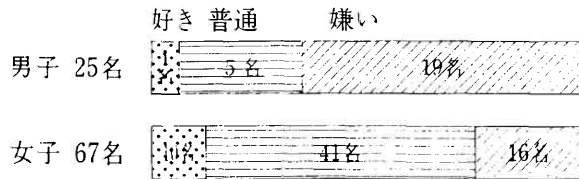
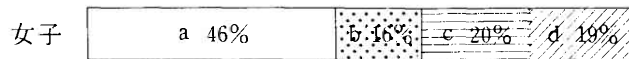


図3. 表現・ダンスの経験
高野章子（都立国分寺高等学校）

Q. 小・中学校で「表現・ダンス」をしましたか。



- a. 表現学習、作品づくりを経験した生徒
- b. 基本ステップや既成作品を学習した生徒
- c. フォークダンスのみ学習した生徒
- d. ダンスは何も学習しなかった生徒

あらゆる学習にとって動機は重大な要素である。したがって、現場教師の言葉にもあったように、子どもたちが踊りたい、～のように動いてみたいと思わないと、表現ダンスの学習は、非常に困難になる。いかにして、この踊りたいと思う刺激が与えられるかということが、表現ダンスの学習の成立にかかっている。特に導入段階は今後の表現ダンス学習に対する意欲、希望が大きく左右され、子どもたちのダンス観を決定づけられるものである。図2を見てみるとかなりの生徒が小学校時に表現ダンスを経験してきている。しかし、図3、図4と年齢が上がるにつれ、経験してきた割合が減っている。その時代、地域によってかなりバラツキがあると思われる。ここで、

特に注意すべきことは、図4の男子学生の97.7%は表現ダンスは全く行ってこなかったことである。表現ダンスは、内的イメージを表現する創造的な動きの自己表現である。競争して勝敗を決めたり、障害を克服したりする他の運動と異なって、自己を表現するという精神活動をとまなう運動である。自己を表現するという精神活動は、音楽、作文、絵画などと同じように自由な中に美を求め、情緒にゆり動かされ、創造性を培い、リズムの中に存在しながら自己を表出するという活動である。律動的な大筋運動と自己表現という精神活動二つの側面がお互いに働きかけ合って各自のオリジナルな表現ダンスが生まれるのである。表現ダンスでしか味わうことができない楽しさはこうした特質の中で考えられよう。この楽しさを感じるチャンスが男子学生には、特に少なかったのである。今後は新指導要領により、男子にもかなりのそのチャンスが与えられることになった。だが、男子はもちろん、女子においても小学生の時にダンスに対して楽しさを見つけることができなければ、選択の段階でシャットアウトされてしまうだろう。

他のスポーツ、例えば球技などは、『相手にボールをとられないようにしよう。』とか、『今度はシュートしたい。』のような小さなことや『試合に勝ちたい。』などのような大き

図4. 表現・ダンスの経験

古川佳子（城内小学校）、今雪美千恵（福岡教育大学）、井口美智代（浮羽高校）

Q. 小・中・高校までに「表現・ダンス」をしましたか。

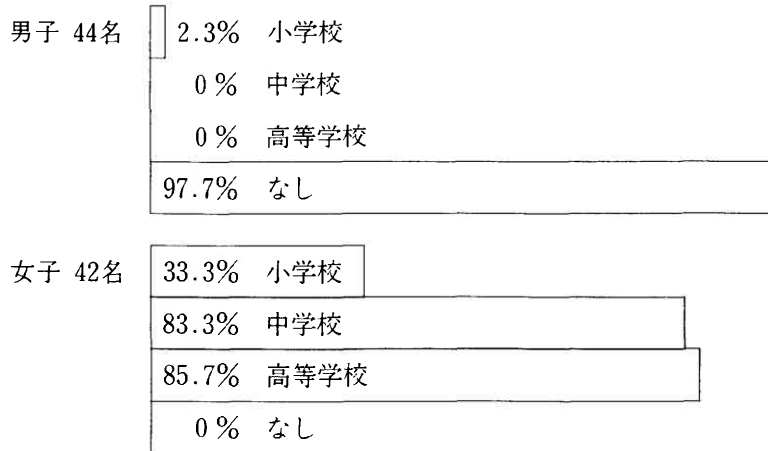
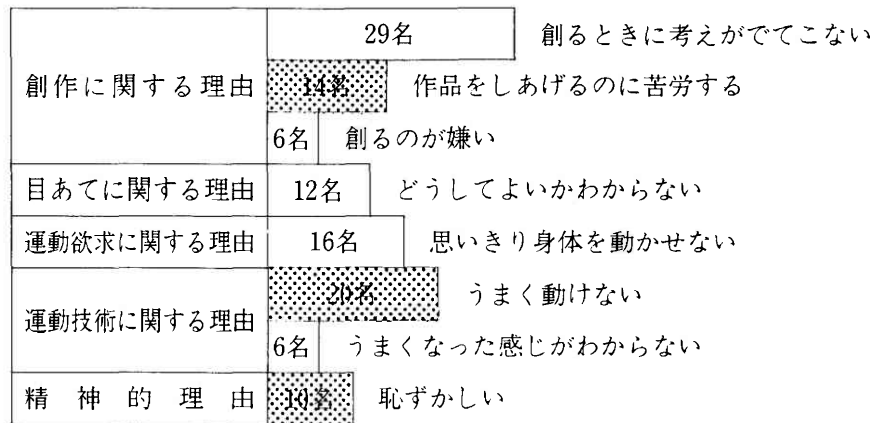


図5. ダンスが嫌いな理由

中村久子（徳島大学）

Q. 「ダンスが嫌い」と答えた人に聞きます。その理由は何ですか。

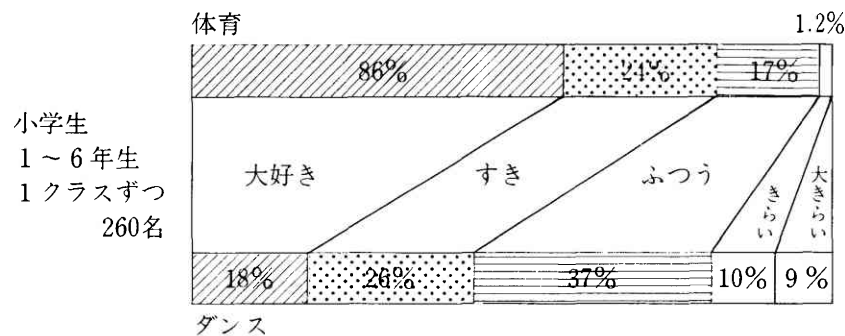


中学校2・3年生 ダンスが嫌いな生徒 42名

図6. 体育・ダンスの好き・きらい調査

酒井一（長野県松本市二子小学校）

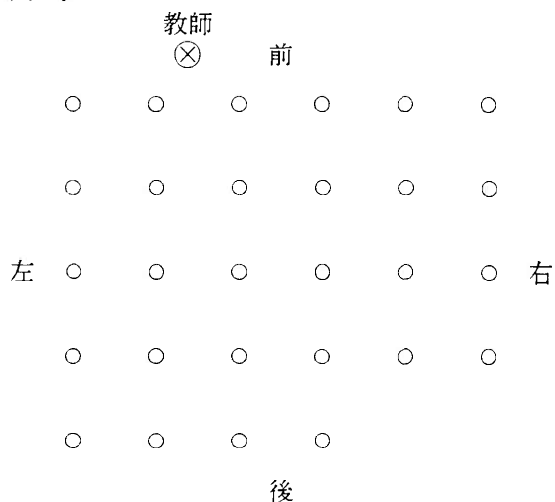
Q. あなたは体育・ダンスが好きですか。嫌いですか。



な希望、目標が学習者に沸きやすい。また、子ども自身、『あっ開脚前転ができた。』『相手チームに勝った。』などと結果も判断しやすい。これは同じように教師にも言えることで、型がはっきりしているから、『できている。』『まだ、できていない。』『上達した。』など、実感しやすい。型の決っているものは、完成されたその技への技術指導が、現場ではまだまだ中心になっている。指導書を読めば、どこを注意、教えたなら良いか、次の段階の練習方法はどのようなものがあるかが、全てわかる。しかし、表現ダンスの授業では表現ダンスは、心と身体が、自分のイメージの世界で自由に飛び回り、遊び、自分の世界を創ることであるため、このような技術指導優先型は、通用しないことが多い。したがって、子どもたち1人1人が自分の個性を出す大切な場なので、画一的な指導はできないのである。現場の教師の言葉にもあるように、どのような言葉がけをしていいかと、とまどってしまう理由はここにあったのだと考えられるのではないか。この問題を未解決のまま授業をすると、ダンスは自分で創り、踊るものだからと、初めてダンスをする子どもたちを放任してしまったり、形を意識しすぎて、動きの指導のみとなっていたりするるのである。これらを解決するために次のような提案をしたい。まず、表現ダンスは、『創る』、『踊る』、『観る』という3つの要素から成り立っている。それぞれ大きな魅力を持っている。表現ダンスは、気持ち、心が動けば、誰にもできるもので、自己に陶醉すれば人を創造へと向かわせるといえるものである。しかし、導入段階から自己に陶醉させることはなかなか困難である。導入段階では、後に具体的な指導例を提示してみるが、運動イメージを触発するような方法が受け入れられやすいようである。表現ダンスの楽しさを少しでも知ったうえで、他からの意見、感想によって自分の踊りを構成の変化よりふくらんだイメージで観る相手を意識した作品になっていくであろう。さらに人に観てもらいたいというような欲求が生まれ、1つの自分の作品を踊り込むようになる。これは全て踊ることの楽しさを中心に運ばれているものである。

しかし、図5にあるように子どもたちは、いずれも踊って楽しむことより創作に重点をおいているために引き起こされる抵抗感がある。特に、『恥ずかしい』からダンスが嫌いな生徒には、表現的に動く（踊る）ことから始めずに、動いているうちに動きが表現的になるような指導を考えるべきである。具体的に、T女子大1年生60名に次のような導入で行ってみた。導入方法の1つとして提示してみたい。学習者が図7のように座っているとすれば、前例から順々に両手を上げて、下ろす、これを続けて後列まで行う。次は両手を上げる時には立ち、下ろす時には座る。最近、サッカーの試合の応援などに見られる『ウェーブ』の動きを学習者にやってもらう。自然に自分の手を上げるタイミングを読めるようになる。イメージを聞くと、『波』『風』などとそれぞれ、その簡単な動作の中に、自分のイメージを感じとっている。ここですでに学習者は表現ダンスを始めているのである。もちろん、ダンス、ウォーム・アップとして簡単なリズムにのせて、

図7.



日常動作的な動き、(手をたたく、歩くなど)を全員で働くことも1つの方法である。しかし、これは教師自身が表現ダンスに対してある程度自信を持つことができてないとなかなか実行できない場合が多いようだ。『恥ずかしい』を理由にしている学習者には、私の経験からも前者の導入方法のほうが有効であると思う。後者の導入方法では、恥ずかしさを取りさろうとするあまり、『もっと大きく動こう』とか、『よく見てね。』などの言葉がけを多くしてしまうが、恥ずかしいと感じ

ている学習者は、その言葉がけによってより身を固くするケースが多いようである。前者の方法では『恥ずかしさ』をとりさるというよりは前の人の動きに身体も心も引きずり込まれて、他者の目を気にすることが少ないようである。その後、『波』を発展させるために前列からだけでなく後ろから、左右から、斜めからと、動きは単調だが方向を変化させてみる。そして、次には座るだけでなく伏せてみたりと動きをイメージとかけ合わせながら大きくしていくことも難しくなかった。学習者が動いた後に『これで表現ダンスになるんだ。』、『結構、簡単なんだなあ。』と感じることができたら、導入段階の課題である、・気分をほぐす・イメージをほぐす・課題への動機づけになるであろう。恥ずかしがらずにやりなさいというより、恥ずかしがらずにできる課題を与えてあげることのほうが重要である。踊ることの楽しさを知ることができれば、自然と解決していく問題であると言えよう。

子どもたちの創った作品に対するアドバイスをいつも的確に与えることはたいへん難しいことである。子どもたちが動きにつまんでいるときには、子どもたちの心に刺激を与えてやるのが重要ではないだろうか。人は誰でも何らかの刺激があれば、何らかの反応をする。しかし、必要としている刺激を言葉がけのみで与えることは困難でもある。そこで、音楽、絵画、図鑑、写真、映画、VTRなどを利用することはイメージの広がり、動きのヒントだけでなく、よりよい流れやまとまりを創ることにたいへん有効である。教師はこれらを子どもたち自らが選択し、利用できるようにすることがより大切である。また、忘れてならないのが、表現ダンスの楽しさの1つでもある『観る』という行為である。子どもたちが、お互いの作品を観る楽しさが、教師の目では気付くことができなかったその作品の良さを見つけることもあるだろう。したがって、表現ダンスの評価にも言えることだが、教師が考えたのとは別のアドバイスが子どもたちからお互

いにできるのである。その為に1時間の授業の中にお互いの『見せ合い』の時間を設けるべきである。それは、1人が全員の前で発表するという形より、全員を半分に分け、数十名が一度に踊る形の方が、初段階では、受け入れられやすいようである。そして、そこで踊りっぱなしにせず、児童・生徒に「おもしろかったのは誰の動き？」と問いかけたり、「○○さんの動きは××の感じがすごく出ていたね。」などの感想、助言を言葉にしてみることも心がけたいものである。これは、作品の評価にも言えることである。それに加えてダンスは一過性のものであり、数値としての記録が残るものでないから、作品をVTRなどに収録し、自分の作品を観る機会を与えてやることも大切である。例えばT女子大学の1年生が自分の作品や他の学生の作品を観ての感想で、『私は「もちつき」という作品が一番おもしろかった。おもちのねばりのあるところがとてもよく表現されていた。私たちの作品はもっと全身（顔の表情も含む）をふるえるところはふるえ、弾むところは弾んだほうが良かったのでは。次回はもっとがんばりたい。』と書いている。このように、VTRを見ることによって自己評価することもできるのである。また、これらのことは経験の浅い教師たちにも可能な方法だろう。

ま と め

今日、ダンスの種類は、多種多様である。バレエ、日本舞踊、ジャズダンス、タップダンス…。それらは、その一つ一つがたいへん魅力的であり、ダンス人口は増すばかりである。生涯体育を考える時、人の好み、体力、経験、価値観などから、自分に合うものを選び楽しんでいる。ここで言えることは、経験のあるものは入りやすく、経験のないものはためらいがちになる。踊ることの楽しさ、特に表現ダンスは、最終的に自分を表現したい気持ちにとらわれるだろう。それは、絵を描くこと、音楽を作ること、文章を書くことにも同じことが言える。他の人に自分を知ってもらいたい、自分が表現したことを理解してもらいたい。このために、自分を知ることが重要な事に気付くのである。表現ダンスは、私たちの日常生活の延長である。したがって、誰も「できている。」「できていない。」などと判定することはできないのである。より自分を表現するには、どう工夫したら良いかわからない時には、教師や他の友達の美感をぶつけることも1つの方法であろう。ここで教師は、自分のめざす高い技能へいかに全員を引き上げるかをめざすことに執着せずあくまで、個々の力に応じてダンスの楽しさを知らせる助けをして、自ら向う姿勢をはぐくむことを助けなければならない。

これらのことを踏まえた上で、表現ダンスを学習するチャンスが与えられた、学習者には導入段階を大上段にかまえることなく指導していくことが望ましい。例えば、『花』を教師が題材にとり上げた時、教師が想像している作品に近づけようとして、児童・生

ダンス学習指導における導入方法について

徒の指先を伸ばすことを指導するのはナンセンスと言えよう。教師は、導入段階を、表現ダンスの困難さを指導する場としてしまわないことである。それよりも『花』という題材から学習者は、どのように刺激されたかを理解することが、感じる事が重要であろう。導入段階の学習者の動きからイメージはたくさん沸くが、動きにできない、動きは素晴らしいがイメージに乏しいなどと各自のこれからの課題も徐々に見えてくるであろう。せっかく学習のチャンスがダンス嫌いを作ることにならないようにしたいものである。

確かに今回、現場の教師の言葉にもあったように「表現ダンス」の学習指導は難しい面もある。しかし、他の種目では味わうことのできない身体を使って自己を表現する楽しさを、学習者に体験させてあげたいものである。

文献

- 1) 酒井一「次の学習活動に生きる評価活動工夫」学校体育、1987年2月号、日本体育社
- 2) 高野章子「一時間ごとに楽しくダンスの本質に触れさせる指導」学校体育1980年10月号、日本体育社
- 3) 中村久子「抵抗感をなくす『ほぐし』の段階」学校体育1980年10月号、日本体育社
- 4) 大石三四郎、浅田隆夫編「ダンス」ぎょうせい 1983年
- 5) 松本千代栄、片岡康子「ダンス学習法」現代舞踊学双書、1974年、大修館書店